

ロ 草地学会舞台うらの一こま

農学部長をはじめ大原教授、広瀬教授、星野部長ら大物をようする大会運営委員会の構想もまとまり、いよいよこれからというときに万般をつかさどるはずだった村上馨さんが帯広畜大へ出向。これはかえすがえすも残念なことであつた。そのあとはお前が一切の雑用をやれということで適当におだてられたり、叱られたり、行きつ戻りつ——一体農林省から月給を貰つてよいのかな（ほんとにまじめに）思つたくらい——それでも部内の諸君はもとより北大の諸先生などに大いに協力してもらつたおかげで大した手違いもなく8月28日を迎えた。気がかりなことが一つあつた。それは29日に予定されているボンマー、クリューガーに対する記念品贈呈式、引き続き学会功労者（町村知事はか3氏）に対する感謝状および記念品贈呈式の舞台装置をどうするかであつた。以下贈呈式に漕ぎつけるまでのてんまつ。

28日午後、贈呈式次第について三井、大原、星野三者会談。クリューガー氏のために日本草地学会としての記念品を28日中に適当に見繕つて準備すること、ボンマー、クリューガー両氏に花束贈呈を行うこと、そのための女性を二人早急に見つけることがきまつたが式次第については意見がまとまらず、夜の懇親会のあとに改めて検討するというので散会。大丈夫がなと思つたが案の定、懇親会のあとのコースに贈呈式の段取りが組まれるわけではない。明くれば29日、花束は明道花店に頼み、二人の女性もやつとのことできまつたので何れともあれ式次第をきめてもらおうとあせつたが、弱り目にたたり目というのか贈呈式に先立つ特別講演の第1演者、町村敬貴さんの胸につけるべき大きいリボンがない。講演開始寸前のことなので手の打ちようもない。贈呈式までに何とか間に合わせるように手配。それやこれやで時間は容赦なく経過する。大原先生の講演の終るのを待ち、やつとの思いで三井、大原、星野三巨頭にロビーにお集り願つたのが10時30分を過ぎていたと記憶している。さつそく1時間後に迫つた贈呈式次第についてけんけんがくがく。三巨頭から三様の案が出されたのだから無理もない。30分経つてどうにか星野案で落着。贈呈式が始まるまでの30分間の短かつたこと。花束はともかく、外人阿氏に贈呈する記念品がややこしい。日本草地学会と北海道草地研究会からそれぞれべつに2種類ずつのものをしかもボンマー、クリューガー両氏同じものではなく（したがつて4種類になる）さらに見かけは四つともほとんど区別しにくい同じ大きさの包装のものを学会長と研究会長がべつべつに贈呈するという仕組みだつた。何とか間違わずに切り抜けられたのはついていたという以外の何物でもない。

北海道農業試験場草地開発部

新 田 一 彦